

デフォルト志向性解除と歴史的現在

林 高宣*

Takanori HAYASHI

Default Preference Override and the Historic Present

ABSTRACT

Hirose (2013, 2015), 廣瀬 (2016, 2017) が提唱する言語使用の三層モデルに基づき, Konno (2015), 今野 (2017) は個別言語が無標の場合に示す意味・語用論的傾向をデフォルト志向性と呼んでいる。そして, 有標形式においてデフォルト志向性が解除されるデフォルト志向性の解除 (以下, 「デフォルト志向性解除」とする) という考え方を提唱している。本稿では, デフォルト志向性解除について考察し, 英語における歴史的現在はデフォルト志向性解除の一例であるが, 英語特有の報告者の視点を免れることができず, 歴史的現在と過去時を表す副詞表現との間に不調和が生じること, さらに提示モードである自由間接話法も英語においては有標形式であり, 歴史的現在と同様に報告者の視点を反映した過去時制が用いられることを述べる。

【キーワード：デフォルト志向性解除, 歴史的現在, 自由間接話法】

1. 言語使用の三層モデル

まず, 1 節では廣瀬が提唱する言語使用の三層モデルについて概観し, その妥当性を見ていく。三層モデルの妥当性は遂行節 I tell you や心理述語等によって支持される。

1.1. 公的自己・私的自己と三層モデル

廣瀬(2017)によれば, 言語使用は状況把握, 状況報告, 対人関係という三層からなっている。そして, これらの層の組み合わせは言語の持つ自己中心性(無標の直示的中心)が公的自己(伝達の主体)にあるか, 私的自己(思考・意識の主体)にあるかによって変わってくる。

まず, 公的自己・私的自己について見てみよう。廣瀬(2017: 5)によれば, 公的自己とは聞き手と対峙する伝達の主体としての側面を指しており, 日本語では「私・僕」といった表現によって表される。一方, 私的自己は聞き手の存在を想定しない思考・意識の主体としての側面であり, 「自分」によって表される。

- (1) 「お父さんと僕との関係と, 僕とお祖母さんとの関係とは全然別なものに僕は考えているんです。それはお母さんも認めてくださるでしょう?」自分は少し亢奮して云った。

(志賀直哉『和解』)

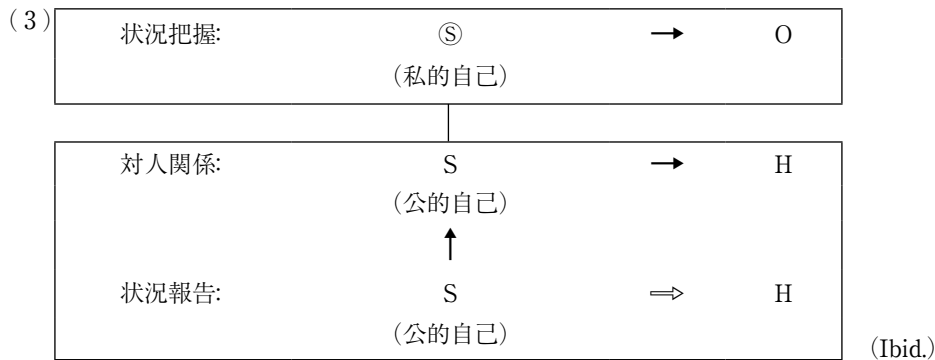
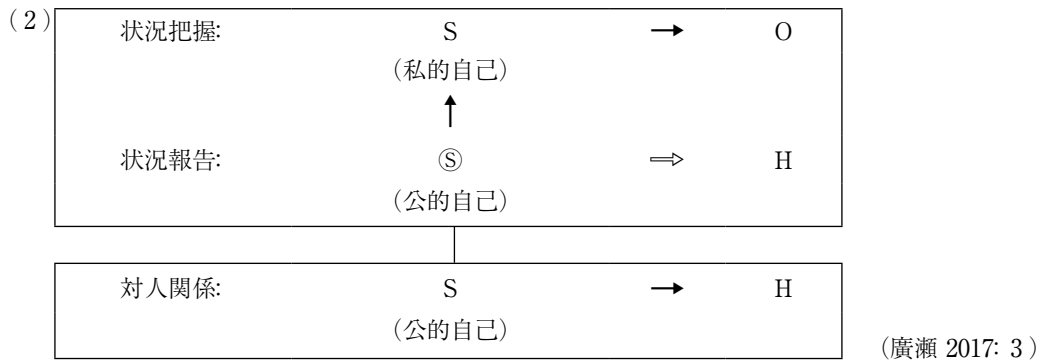
廣瀬は, 公的自己と私的自己との違いを(1)における「僕」と「自分」の違いとして捉えている。(1)において

聞き手である母親と対峙する話し手は「僕」を用いて表現されているが, 話し手が聞き手の存在を想定せずに自らを振り返る場面では私的自己が「自分」によって表現されている。

次に公的自己・私的自己と状況把握, 状況報告, 対人関係という三層の関係を見てみよう。無標の直示的中心が公的自己にある英語では, 三層の組み合わせは(2)のようになる。¹Konno (2015), 今野(2017)は個別言語が無標の場合に示す意味・語用論的傾向をデフォルト志向性(default preference)と呼んでいるが, 英語では, 話し手によって行われた状況把握を, 聞き手へ向けて伝達する公的表現を無標のレベルとする。つまり, 公的自己による表現(公的表現)を無標とするというデフォルト志向性を示す。(2)における公的自己⑤から私的自己Sへの縦矢印について, 英語では状況を把握する私的自己が状況を報告する公的自己の視点から捉えられることを表すと廣瀬は述べているが, これはより端的には「英語では状況報告を前提として状況把握がなされている」と言い換えることができる。

一方, 無標の直示的中心が私的自己にある日本語では三層の組み合わせは(3)のようになる。日本語では, 私的自己に重点が置かれ, 話し手の私的表現を無標の表現レベルとするというデフォルト志向性を示す。そのため, 「今日は金曜日だ」という平叙文は無標の文脈, すなわちデフォルト志向性を維持したままの表現としては状況把握層における表現に過ぎず, [状況報告+対人関係]の

* 島根大学学術研究院教育学系



部分は [状況把握 今日金曜日だ] + [状況報告+対人関係 よ/ですよ] のように終助詞や助動詞を用いて表される(今野 2017: 71)。

また、状況報告者 S から対人関係層の公的自己 S への縦矢印について、廣瀬(2017: 3)は「日本語では公的自己は状況を報告する際に聞き手との関係において自己を規定する」と述べているが、これも「日本語では対人関係を前面に出して状況報告を行う」と言い換えることができる。

以上から日本語では、「聞き手志向表現」をとらない命題は状況把握、すなわち私的表現と解釈されると廣瀬(2017: 5)は述べている。²

廣瀬によれば、日本語では私的自己は(1)のように「自分」という表現によって表されるが、英語における I のような公的自己を表す固有の言葉がないため、「ほく」「わたし」「お父さん」「先生」などの発話の場面に左右される表現が使用される。これは、すでに「日本語では対人関係を前面に出して状況報告を行う」と説明したように日本語の特徴を表している。一方、英語では私的自己を表す表現がないため、日本語の「自分」に相当する表現がどの人称に相当するかによって、人称代名詞 I/you/he/she が用いられることになる。

このような日英語の違いは間接話法の文法に反映されている。日英語ともに、直接話法は公的表現を引用したもの、すなわち状況報告レベルでの表現であるが、間接話法は私的表現の引用、すなわち状況把握レベルでの表現である。

- (4)a. 自分は絶対に正しい(と {ほく/きみ/彼} は思った)。
 b. {I was/You were/He was} *absolutely right*(, {I/you/he} thought). (廣瀬 2017: 6)

(4a)のように日本語では私的自己を表す「自分」という表現が存在するため、間接話法で私的表現が用いられる。一方、英語では私的自己を表す表現がないため、日本語の「自分」に相当する表現がどの人称に相当するかによって人称代名詞が用いられている。³

1.2. 心理述語

日英語の三層構造の結びつき方の違いは、心理述語の人称制限にも反映されている。状況把握が状況報告から独立する日本語では、心理述語のみを用いた表現は状況把握を行う表現である。話し手にとって把握可能な心理状態とは自分の心理状態のみであり、他者の心理は対象外である。その結果、(5a)は適格であるが、(5b)は不適格となる。

(5)a. {ほく/わたし} は、うれしい。

b. *{あなた/彼} は、うれしい。 (廣瀬 2017: 10)
 (5b)を適格にするためには(6)のように報告者の視点を保証する表現が必要となる。

(6)彼は、{うれしがっている/うれしいらしい/うれしいって}。 (Ibid.)

このように(5)(6)は日本語において状況把握と状況報告が独立していることを示している。

これに対し、英語では状況把握と状況報告が一体化しているため、一見したところ報告者の視点を反映していないかに見える *He is happy.* が適格である。他者の心理が表されているにもかかわらず、伝達形式をとっていない理由は、*You think/He thinks* の伝達節が省略された一種の「自由間接話法」と分析することができるからであると廣瀬(2017: 10-11)は述べている。

心理述語 *want* に対しても同様のことが言える。状況

把握と状況報告が一体化していない日本語では、他者の願望を報告する場合、(7a)のように「と思っている」という伝達節は不可欠であるが、両者が一体化している英語では(7b)のように心理述語 *want* を本動詞として用いることができる。

(7) a. 彼は教師になりたい*(と思っている)。

b. He (thinks he) wants to be a teacher.

(廣瀬 2017: 11)

廣瀬(2017: 11)によれば、英語では心理述語は心理報告のために用いられ、自己と他者の対立は形式的に中和されるが、日本語では心理述語は自己の心理表出のために用いられ、心理述語のみで他者の心理を報告することはできない。

1.3. 直接的状況把握と間接的状況把握

日本語では状況把握と状況報告が一体化していないのであるが、その状況把握は「直接的状況把握(直接把握)」と「間接的状況把握(間接把握)」に分けられる(廣瀬 2017: 12)。

(8) 状況把握(私的表現)

a. 直接把握: 「雨だ」(断定: 直接知覚)

b. 間接把握: 「雨に違いない」(確信), 「雨だろう」(推量), 「雨ならなあ」(願望), 「雨だろうか」(疑い)

直接把握は、(話し手の)直接経験(「今日はよく寝た」)、直接知覚(「雨だ」)、直接知識(「今日は土曜日だ」)によるものであり、間接把握は、推論、想像、疑い、願望などによる状況把握である。

廣瀬によれば、日本語の無標の表現形態である単純平叙文は、直接把握を表す私的表現である。これに対し、公的表現である状況報告は(9)のように考えられる。

(9) 状況報告(公的表現)

a. 直接把握の報告: 「雨だよ/雨です」

b. 間接把握の報告: 「雨に違いないね」、「雨でしょう」、「雨ならなあと思うよ」、「雨でしょうか」

(廣瀬 2017: 12)

英語では無標の表現形式は公的表現であり、単純平叙文の発話が表す情報を聞き手に伝達し、聞き手と共有することが重視される。結果的に、情報が直接把握されたものか、間接把握されたものかは二次的となり、英語では(10a)の直接知覚も、(10b)の推論による間接把握、(10c)の伝聞による間接把握も、すべて同じ形をとる。

(10) a. [*The speaker is looking out the window.*]

Oh, it's raining.

b. It's raining (, because they are walking under their umbrellas).

c. A: What did John say?

B: It's raining. (廣瀬 2017: 13)

1.4. 状況報告と対人関係

日本語では対人関係と状況報告が一体化し、それら

ら状況把握が独立している。つまり、「日本語では対人関係を前面に出して状況報告を行う」と言い換えることができる。そのため、日本語は状況伝達の際に対人関係を前面に出す働きを持つ「聞き手志向表現」をとることになる。一方、英語では状況把握と状況報告が一体化し、それに対して対人関係層が付加されている。つまり、「英語では状況報告を前提とした状況把握がなされている」と考えられ、結果的に対人関係層の影響を受けることなく、相手が誰であろうと人称代名詞 *you* を用いて報告することが可能である。

このような状況報告と対人関係の一体化の有無は、公的自己を表す表現の場面依存性に反映されている。父親が子供に話す場面において、日本語では(11)は適切であるが、(12)は不適切であると廣瀬は述べている。⁴

(11) お父さんは、夕食の前に手を洗わないのは行儀がわるいと思うよ。(廣瀬 2017: 15)

(12) a. #ぼくは、夕食の前に手を洗わないのは行儀がわるいと思うよ。

b. #わたしは、夕食の前に手を洗わないのは行儀がわるいと思います。(Ibid.)

このように日本語では通常、英語の一人称に相当する形式は用いない。⁵

2. デフォルト志向性解除

廣瀬の提唱する言語使用の三層モデルは、個別言語が私的自己・公的自己のどちらに重点を置くかによって、状況把握層、状況報告層、対人関係層の結びつきが異なることを主張する理論であり、言語の意味・語用論的傾向をこれらの三層構造によって説明するものである。今野(2017: 69)は、個別言語が無標の場合に示す意味・語用論的傾向をデフォルト志向性と呼び、有標形式においてデフォルト志向性が解除されるという事実は、デフォルト志向性を否定するものではなく、逆にそれを補完するものであると述べている。

日本語では、私的自己に重点が置かれ、話し手の私的表現を無標の表現レベルとするというデフォルト志向性を示す。これに対し、英語では、話し手によって行われた状況把握を、聞き手へ向けて伝達する公的表現を無標のレベルとする。その結果、*Today is Friday.* という平叙文は、話し手の認識を表すだけでなく、対人関係を表さずに聞き手への伝達を目的とした公的表現と捉えることができる。*Today is Friday, madam.* のように呼称によって対人関係を明示することもできるが、これはあくまで付加的であると今野(2017: 72)は述べている。

2.1. 日本語におけるデフォルト志向性解除

以上のようなデフォルト志向性解除について日本語と英語の両言語について概観する。まず、日本語におけるデフォルト志向性解除の例である副詞的拡張用法としての「やばい」、さらに「からの」の単独用法を見てみよう。

2.1.1. 副詞的拡張用法としての「やばい」

今野は形容詞「やばい」が肯定的評価を伴って使用されるようになってきたことを指摘し、副詞的拡張用法として次の例をあげている。

(13) タマゴボーロやばいよ！やばいうまいよ！

(今野 2017: 73)

(13) の前半部分の「やばい」が肯定的評価を持って使用される形容詞の用法であり、後半の「やばい」が副詞的拡張用法である。

そして、この副詞的拡張用法には公的表現として機能するという語用論的特徴があると述べている。

(14)a. ねえねえこれやばいうまいよ。

b. (??)うわあこれやばいうまいなあ。

(今野 2015a: 330f.)

今野が述べているように (14) の適格性に対する判断は、インフォーマント 8 名を対象とした調査であり、情報の正確さには少々問題があるかもしれないが、呼びかけ表現「おい」や「～よ」は聞き手の存在を前提とした公的表現を表し(廣瀬 1997: 7)、感嘆表現「わー」「～なあ」は聞き手の存在を前提としない私的表現を表す(Hasegawa 2010: 160)。つまり、副詞的拡張用法「やばい」は公的表現を無標とするという特徴を持ち、話し手の私的表現を無標とするというデフォルト志向性を示す日本語においては、デフォルト志向性解除の例であると考えられる。

2.1.2. 「からの」の単独用法

さらに、今野 (2017) は、格助詞「から」と連体助詞「の」が組み合わさった「からの」が単独で用いられる例をあげている。

(15) A1: 私は君をこき使うことはない。だがもう、
守ってやることもできない。ここからは自分一人の戦いだ。

B1: なんて、なんで悪口言わないんですか？ 言って下さいよ、いつもみたいにひどいこと。

A2: 君には迷惑をかけられっぱなしだったが、おかげで退屈せずに済んだよ。礼を言うよ。

B2: からの？ 悪口でしょう？

A3: ありがとう。

B3: からの？

A4: 頑張りたまえ。以上だ。(今野 2017: 75)

拘束形態素が単独の発話を形成し、自由形態素であるかのごとく使用されている。

今野によれば、「からの」には、先行する情報を受けて話し手が聞き手に情報を提示する「提示タイプ」(16) と、先行する情報を受けて話し手が聞き手に対して情報提供を要請する「提示要請タイプ」(17) がある。

(16) クリスマスにもオススメ！からの—

(17) A1: 昨日女の子と歩いてたよな？

B1: あ、あれは ... 妹だよ

A2: からの？

B2: 実は彼女なんだ

A3: からの—？

B3: 初めてのデートだったんだよ

A4: か—ら—の—？ (今野 2017: 76)

(16) の話し手は、先行する情報を受けて、それだけに満足することなく、さらなる情報を提示し、(17) では話し手 A が先行する情報を受けて、さらなる情報を求めている。今野 (2017: 78-79) によれば、「からの」は談話レベルで先行する情報に関する状況把握層を含み、後続する情報提示や聞き手への情報提示要請に關係する状況報告層も含んでいる。つまり、私的表現を無標とする日本語において公的表現という形式をとっている。

さらに、「からの」は親近感を持って情報提示、情報提示要請を行う表現であり、副詞的拡張用法「やばい」が公的表現を無標とするのとは異なり、公的表現に特化していると今野 (2017: 78) は述べている。感嘆表現「うわあ」は聞き手の存在を前提としない私的表現であるため、親近感という対人関係を基に使用される自由形態素的用法は不可能となる。

(18) [バイトのシフト表で、自分が夜勤から日勤の連続勤務なのを見て]

a. ??うわあ、からの。

b. うわあ、夜勤からの日勤。(今野 2015b: 343)

(18a) は「うわあ」と共起することで感嘆を表しており、もはや提示や提示要請の機能を持たなくなったことが明らかである。そのため、(18b) のように通常の拘束形態素としての働きしかできない。

2.2. 英語におけるデフォルト志向性解除

さらに、英語におけるデフォルト志向性解除の例として、懐疑応答構文、日記文における主語の省略、明示的遂行節について見ていきたい。

2.2.1. 懐疑応答構文

今野は英語におけるデフォルト志向性解除の例として Mad Magazine 構文をあげている。ここでは Szcześniak and Małgorzata (2015) に従って懐疑応答構文 (incredulity response construction) と呼ぶことにしたい。この構文は、ある状況に対する話し手の驚きや不信を表し、動詞が原形であり、対格の代名詞が主語位置に現れる。

(19) Hearing from Tom that Bronsky went to the party in a tuxedo,

a. Mary said "Him wear a tuxedo?!"

b. ??Mary told him "Him wear a tuxedo?!"

(今野 2012: 28)

今野によれば、懐疑応答構文は単に感情の表出をするための私的表現である。その結果、(19a) のように伝達を目的とする場合にもそうでない場合にも使用できる動詞 say とは共起可能であるが、話し手の存在を前提として伝達のために用いられる動詞 tell とは (19b) のように共起不可能となる。⁶

結果的に懐疑応答構文は状況把握層のみを表してお

り、公的表現を無標の表現レベルとする英語においてデフォルト志向性解除を示している。

2.2.2. 日記文における主語の省略

さらに、英語におけるデフォルト志向性解除の例として、今野は日記文における主語省略をあげている。日記文では動作の主体はあくまで書き手であり、自らに関する状況把握を中心とするため、この構文も私的表現であると考えられる。その結果、先ほどの懷疑応答構文と同様に動詞 *say* の直接話法補部には生起可能であるが、動詞 *tell* の直接話法補部では不適格となる。

(20)a. She said in her diary “Do not even know where am meeting him.”

b.*She told me “Do not even know where am meeting him.” (今野 2017: 85)

また、日記文における主語省略の場合、呼称と共起することができない。呼称は対人関係を意識した、報告を前提とする表現だからである。

(21)a. Do not even know where am meeting him.

b.*Do not even know where am meeting him, baby.

c. I don't even know where I'm meeting him, baby. (Ibid.)

(21a)は日記文としては適格であるが、(21b)のように呼称を用いると不適格になる。このことも日記文が私的表現であることを意味している。日記文でない(21c)は公的表現であるため、呼称との共起は当然可能である。⁷

2.2.3. 明示的遂行節

英語では直示の中心が公的自己にあり、状況報告を前提に状況把握がなされている。その結果、状況報告は対人関係を意識することなくなされるのが無標の状態である。英語では、遂行節 *I tell you* は明示的には用いられず、従って遂行節を除いた、言わば命題内容の部分のみが無標の言語形式となる。電話中に用いられた(22)における明示的遂行節は不自然であると感じられる。

(22) A: How's the weather in Tokyo?

B: *I tell you, it's raining. (五十嵐 2017: 113)

遂行節が用いられると、話し手は聞き手より情報的に優位であることを示すことになり、情報伝達が情報の優位者(話し手)から劣位者(聞き手)へ一方的に遂行されることになる。五十嵐(2017: 123)は述べている。この場合、有標である明示的遂行節はデフォルト志向性解除の一例である。つまり、「無標の情報伝達様式(相互的情報共有)」では、意図した情報伝達の達成見込みが低い場合(当該情報を聞き手に受け入れてもらうことが見込まれないなど)、デフォルト指向性を解除する *I tell you* の使用が認可される(五十嵐 2017: 123-4)と説明される。

五十嵐は明示的遂行節の例をいくつか挙げている。(23)は前の晩にバーで酒を飲んだ後のAとBの対話であり、Bには前夜の記憶がない。

(23) A: Man, who were those girls you were talking

to last night? They were HOT!

B: Honestly, I tell you I can't remember a thing last night. (五十嵐 2017: 126)

AはBに前夜の記憶があると想定し、問いかけをしているが、BはそうではないことをAに認識してもらうため(つまり、Bは意図した情報伝達の達成見込みが低いと考え)、デフォルト志向性解除の一例である明示的遂行節 *I tell you* を使用している。

さらに、次の例では遂行節がポライトネス戦略として用いられていると五十嵐(2017: 127)は述べている。

(24) Salieri: Mozart. Mozart, I would never miss anything that you had written.

Mozart: It's just a vaudeville.

Salieri: No, no! It is a sublime piece. The grandest operone! I tell you ... you are the greatest composer known to me.

Mozart: Do you mean it? (Amadeus)

遂行節は、情報伝達上の話し手側の優位性を示し、情報を聞き手に押し付ける。これは(23)のような場合には、ある意味無礼な行為となることもあるが、(24)のように相手を褒めるなど、情報が聞き手にとって有益である場合にはポライトネス戦略として機能することになる。

3. 提示モードと歴史的現在・自由間接話法

この節では、長谷川(2017)が提唱する「提示モード(発話)」が物語の登場人物の視点からの状況提示であることを示し、日英語における歴史的現在(historic present)の特徴の違いについて考察する。そして、提示モードである歴史的現在は英語におけるデフォルト志向性解除の一例であるが、英語特有の報告者の視点を免れることができないため、時制本来の用法と副詞表現との間に不調和が生じることを示す。また、自由間接話法も英語においては有標形式であり、提示様式という点でデフォルト志向性解除の一例であることを述べる。歴史的現在と同様に報告者の視点を免れることができないため、自由間接話法に見られる発話形式と時制の不一致が生じる。

3.1. 提示モード

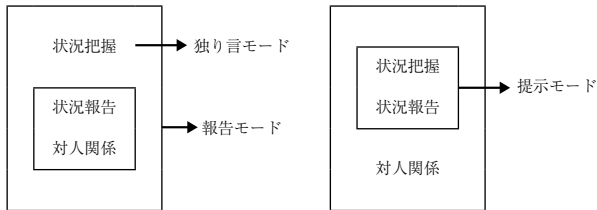
長谷川(2017: 26)は、日本語の研究において「独り言」という言葉が頻繁に用いられるのに対し、英語学の論文では「独り言」に相当する言葉が用いられることは皆無であると述べている。その理由として、日本語は状況把握層が状況報告層・対人関係層から独立していることをあげている。つまり、日本語は状況把握層での表現を無標の表現とする言語であり、結果的に無標の表現である独り言に注意が向けられることになる。これに対し、英語では状況把握層と状況報告層が一体化しており、状況報告を前提として状況把握が行われるため、独り言という概念は通常、想定できない。⁸

さらに、長谷川(2017: 27)は、発話が対話的なものから独り言的なものへと連続をなすという考え方を示してい

る。長谷川によれば、日本語では3種類の発話形態が可能である。状況把握の段階で発話がなされると「独り言モード」であり、状況把握を踏まえた上で状況報告・対人関係を考慮すれば「報告モード」となる。そして、両者の中間に位置するのが状況把握と状況報告を融合させ、対人関係を切り離れた「提示モード」である。

それでは「提示モード」とは、いかなる目的のために用いられるのであろうか。長谷川(2017: 36)は「この場合の独り言は、勿論、聞かれることを想定した発話だが、相手に語りかけてはいない。「告げるのではなく、示す」のである」と述べている。純粋な独り言モードと異なり、

(25) 日本語発話のバリエーション



提示モードでは聞き手を想定し、状況提示がなされるのである。

このような提示モードの例として長谷川は会話に挿入される独り言をあげている。

(26) 教師: ほんとに英語では苦労します。

学生: えー、ほんとですかあ？

教師: ほんと、ほんと。

→ 学生: へえー、先生でもそうなんだあ。

(Hasegawa 2010: 158)

(26)は学生が教師と会話している場面であるが、最後に学生の独り言が現れている。学生は教師に対して当然、敬意を持って対応するため、丁寧体を用いて話すのが通常であるが、最後に普通体で独り言を発話している。

長谷川によれば、普通体は「聞き手と親しくて心的距離が近く、相手に対して敬意がない場合」と「聞き手と心的距離が遠く、敬意がない場合」に用いられる。(26)における教師の2回目の発話は前者に相当すると考えられる。これに対し、「聞き手と心的距離が遠く、敬意がある場合」には(26)における学生の最初の発話のように丁寧体を用いられる。

ところが、問題となるのは「聞き手と心的距離が近く、かつ敬意がある場合」である。長谷川(2017: 33)は「この2つの感情(聞き手に対する親しさと敬意)は、共起するのはごく自然であるにもかかわらず、語用論体系では相容れないものとして扱われている。つまり、(A)の場合(聞き手に対する親しさと敬意が共起する場合)、丁寧体を使えば、必然的に距離感が生まれ、使わなければ、不当に馴れ馴れしく聞こえてしまうのである」と述べている。そして、このジレンマを解消するため、会話モードから独り言モード(提示モード)へのメタ語用論的シフト(metapragmatic shift)が生じていると説明している。

3.2. 物語文と提示モード

長谷川は以上のような報告モードと提示モードの使い分けが書き言葉にも応用されると述べ、次の例を引用している。

(27)このうちに相違ないが、どこからはいいいか、勝手口がなかった。(幸田文『流れる』)

芸者置屋に向いた主人公梨花が、雇い主の家を訪れている。雇われ人は、玄関ではなく、勝手口から入るのが習わしであるが、その勝手口が見当たらないという場面である。

長谷川(2017: 38)は、「このうちに相違ない」は主人公の声であるのに対し、「勝手口がなかった」は一人称小説の地の文であり、作者は語り手として読み手に状況を説明していると述べている。⁹

さらに、長谷川(2017: 39)は、(27)における「どこからはいいいか」の部分について「「どこからはいいいか」は、読み手を無視した、語り手の独り言であると分析するのである」と述べている。つまり、長谷川の主張に従えば、この部分で(25)における報告モードから提示モードへの変換が起きており、主人公の梨花ではない、物語の作者が状況提示を行っていることになる。

ここで発話と物語の違いについて考えてみたい。(26)のような発話では、報告モードから提示モードへのメタ語用論的シフトが生じる場合にも、話し手は学生であり、聞き手は教師である。しかし、物語の場合、話し手に対応する語り手は物語の作者のみに限定されない。長谷川は(27)における「どこからはいいいか」の部分提示モードとみなしている。この点に関して異論はないが、物語の作者による提示モードと考えられるべきではない。

長谷川は「どこからはいいいか」の部分梨花の声である解釈として(28)を提示している。

(28)梨花は、「このうちに相違ない」と思ったが、勝手口がなかったので「どこからはいいいたらいいのだろうか」と戸惑った。(長谷川 2017: 38)

しかし、最終的には、この部分を梨花ではなく語り手の声だと判断している。ここで注意すべき点は、物語の場合、状況の提示者に複数の可能性が考えられるということである。(27)では問題部分の状況提示は、作者の視点からなされているというよりむしろ、梨花の視点からなされていると考える方が自然である。物語において提示モードを用いる場合、状況の提示者の可能性が複数あるため、提示者の際立ちに差が生じる。物語では、作者も登場人物も語り手として状況提示に関与できるが、(27)では作者としての語り手より、登場人物である語り手の方が際立っている。そのため、問題の場面から離れている作者の視点ではなく、その場面に存在している登場人物梨花の視点から状況提示がなされる。結果的に提示モードは、読み手を実際に事態が発生している場面へと引き込み、語られる事態が読み手の目の前で起きているかのような印象を与える効果を生むことになる。

提示モードは状況把握層の提示様式であり、状況把握が目的であるため、当然のことながら把握される状況は現在の状況である。つまり、状況提示は現在時制によっ

てなされることになる。提示モードとして使用される言語形式は、現在時制と同じく実際に事態が発生している場面へ読み手を引き込み、語られる事態が目の前で起きているかのような印象を読み手に与える。長谷川によれば、(29a)の下線部は茂の意識を表している。

(29)a. 茂が台所できゅうりを切っていると、オヤ、裏庭で変な物音がする。

b. 茂が台所できゅうりを切っていると、オヤオヤ、今度は警官がやってきた。

(長谷川 2017: 39)

すなわち、この部分は茂の視点から描写されていると考えられる。ここでも提示モードが用いられているが、下線部の「オヤ」という表現と「変な物音がする」という現在時制はともに提示モードとして使用される言語形式である。

これに対し、(29b)は、すべて語り手の声であり、「オヤオヤ」を茂の声とは解釈できないと長谷川(2017: 40)は述べている。(29b)は報告モード(「茂が台所で……今度は警官がやってきた」)に提示モード(「オヤオヤ」)が挿入されているが、これが三人称の語りであるとすれば、すなわち茂の視点からの描写であるとすれば、不自然さを感じる人が多いだろうと長谷川は判断している。

しかし、「オヤオヤ」は茂の意識を表しているとする解釈の方が自然であろう。(29b)の「オヤオヤ」の部分が物語の作者から提示されていると解釈することも可能であるが、(27)における「どこからはいいか」の部分と同様、語られる事態が読み手の目の前で起きているかのような印象を与える効果を持っている。別の言い方をすれば、提示者としては作者より登場人物の方が際立っている。

(29b)の「オヤオヤ」に関しては、提示者として登場人物の方が際立っているとする解釈の方が妥当であると考えられるが、「オヤオヤ」が登場人物ではなく、語り手の視点から提示されていることを示す例として長谷川は(30)をあげている。

(30) 茂が台所できゅうりを切っていると、オヤオヤ、今度は警官がやってきた。我輩は、そそくさと退散することにした。(長谷川 2017: 40)

実際、(30)のように状況提示を行う提示者が明示されている場合、長谷川が主張する通り、状況提示は茂ではなく「我輩」によって行われていると考えられる。但し、この場合にも「オヤオヤ」は、その場面に存在しながら状況把握を行う認知主体の意識であると考えられる。

3.3. 日英語における歴史的現在

ここで日英語の歴史的現在について考えてみたい。(29a)のように登場人物の視点から状況提示がなされる場合、提示モードは歴史的現在の形式をとっている。長谷川によれば、提示モードとは、状況把握と状況報告を融合させ、対人関係を切り離れた発話形態である。物語における提示モードは、読み手がいなければ、状況把握レベルの認知活動のみを表しているということになるが、読

み手を意識した文章となっているため、状況報告の機能が含まれていると考えられる。

英語では、状況把握と状況報告が一体化し、それに対人関係が付加されるのが無標形式である。その結果、英語では対人関係を意識した、例えば(「オヤオヤ」)の部分を除いた(30)のような物語文が無標形式であるということになる。すなわち、英語においては過去時制を用いて語られる物語の地の文が無標形式となる。

しかし、英語においても歴史的現在は見られる。

(31) Mr. Tulkingshorn *takes out his papers, asks permission to place them on a golden talisman of a table at my Lady's elbow, puts on his spectacles, and begins to read by the light of a shaded lamp.* (Leech 2004³: 16)

Leechによれば、(31)は架空の現在時(imaginary present time)に言及する用法であり、実際の歴史的現在とは厳密には区別されるべきであるが、口頭での語りにおける歴史的現在を模して一部の小説家によって用いられている。このような現在時制の用法は英語における通常の慣習からの逸脱であると Leech は述べている。本来、小説では未来の出来事を述べていても地の文に過去時制が用いられるからである。

(32) In the year AD 2201, the interplanetary transit vehicle Zeno VII made a routine journey to the moon with thirty people on board.

(Leech 2004³: 15)

状況報告を前提として状況把握を行う英語では、報告モードが無標形式であるため、報告時(発話時)以前の状況に関しては過去時制を用いることになる。一方、状況把握を無標の表現とする日本語においては、(29a)のような登場人物の視点を通して行われる、現在時制を用いた状況提示が無標形式である。

さらに、純粋な歴史的現在について考えてみよう。

(33)a. At that moment in *comes* a message from the Head Office, telling me the boss *wants to see me in a hurry.* (Leech 2004³: 11)

b. Last week, I'm in the sitting-room with my wife, when this chap next door *staggers* past and in a drunken fit *throws* a brick through our window. (Leech 1987²: 11)

状況報告を考慮する英語では、報告モード(過去時制)が無標形式である。一方、英語の歴史的現在では、その状況が聞き手・読み手の目の前で起きているかのように状況を提示するため現在時制が用いられる。歴史的現在は英語では有標形式であるが、本来無標形式に備わっていた要素、すなわち報告者の視点を免れきれず、(33)のように報告者の視点を反映した過去時を表す副詞表現が、現在時制との不調和を示しながら用いられることになると考えられる。英語において提示モードが有標形式であることは、英語学の論文では「独り言」に相当する言葉が用いられることは皆無であるという長谷川の主張と符合する。

3.4. 日英語における自由間接話法

歴史的現在と過去時を表す副詞表現との間に見られる不調和は、ある意味、自由間接話法に見られる発話形式と時制の不一致にも通ずる。長谷川(2017: 38)は、Tansman(1993)による(27)の英訳を次のように示している。

(34) This was certainly the house, but there was no kitchen door. Where was the entrance?

(Tansman 1993: 13)

(34)のように英訳では自由間接話法が用いられている。長谷川は『流れる』を一人称小説であると述べている。つまり、主人公が語り手となって物語が語られている。自由間接話法とは提示モードの一つであり、日本語では提示モードが無標形式であるため、(27) (29a)におけるように全く文法上の問題なしに歴史的現在が用いられている。

しかし、英語は報告モードが無標形式とするため、提示モードの形をとっていても、報告者の視点を免れることができない。その結果、報告者(語り手)と主人公の視点が混在することになる。指示代名詞 *this* は主人公の視点から選択されているが、*be* 動詞 *was* は英語の物語というジャンルでの約束事である過去時制となり、報告者の視点から選択されている。さらに、*Where was the entrance?* の部分では、発話形式は主人公の視点から見た提示モードをとっているが、時制は報告者の視点から見た過去時制となっている。英語では報告モードが無標形式であるため、動詞の時制は報告者の視点を反映した過去時制となっている。これらの現象は、英語において報告モードが無標形式であることを示しており、日本語の「このうちに相違ない」「どこからはいいか」という提示モードとは対照的である。

英語における歴史的現在や自由間接話法は、個別言語が無標の場合に示す意味・語用論的傾向、すなわちデフォルト志向性が、有標形式において解除される場合に相当すると考えて良いのではないだろうか。英語では報告モードが無標形式であるため、歴史的現在は有標形式である。その結果、現在時制が用いられているにもかかわらず、報告者の視点をとった(33)のような副詞表現が用いられる。また、自由間接話法も提示モードの一つであるため、日本語の自由間接話法は無標形式であるが、英語では有標形式であることを反映して(34)に過去時制が用いられることになる。このように英語における歴史的現在、自由間接話法は緩やかなデフォルト志向性解除の一例であると考えられる。

4. まとめ

個別言語が無標の場合に示す意味・語用論的傾向、すなわちデフォルト志向性が、有標形式において示されていない場合、デフォルト志向性解除が生じる。状況把握を無標の表現とする日本語においては、登場人物の視点を通して状況提示を行う歴史的現在は無標の言語形式である。一方、状況把握が状況報告と結びついている英語

では、報告モードが無標形式である。英語において歴史的現在や自由間接話法といった提示モードは、緩やかなデフォルト志向性解除を示しつつも、最終的には歴史的現在に報告者の視点をとった副詞表現が用いられ、自由間接話法に報告者の視点を反映した過去時制が用いられるなど、無標形式に見られた状況報告の側面を残すことになる。

注

1 状況把握は私的自己Sが状況Oを解釈し、一定の思いを形成する層である。状況報告は私的自己による状況把握を公的自己⑤が聞き手Hに伝達する層である。自己中心性が公的自己にあることが⑤によって示されている。最後に、対人関係は公的自己Sが聞き手との対人関係調節を行う層である。

2 廣瀬によれば、「聞き手志向表現」とは、「よ」「ね」などの一定の終助詞、命令・依頼の表現、「おい」などの呼びかけ表現、「はい」「いいえ」などの応答表現、「です」「ます」などの丁寧体の助動詞、「(だ) そうだ」などの伝聞表現である。実際にこれらは聞き手を意識した表現である。

3 さらに、(2) (3)で見たように英語では状況把握と状況報告が一体化しているのに対し、日本語ではそれらが独立していることを示す証左として、廣瀬は発話行為条件文における日英語の違いを指摘している。

(i)a. If you are interested, she is still single.

b. 興味があるなら「言う/教える」が、彼女はまだ独身だ。(廣瀬 2017: 6)

(ia)におけるように条件節は本来主節に想定される *I tell you* を修飾するが、英語ではそれが現れていなくても適格である。これは英語において状況把握と状況報告が一体化していることを示している。一方、日本語では「言う/教える」がなければ、あるいは「興味があるなら、彼女はまだ独身だよ。」のような聞き手志考表現がなければ不適格であり、日本語では状況把握と状況報告が一体化していないことが伺える。

4 (12a) (12b)が不適切、あるいは不適格であるとは必ずしも言えないかもしれない。父親が自らのことを「ぼく」「わたし」と呼ぶ家庭においては、ごく自然な表現であると考えられるからである。但し、その場合であっても廣瀬の言う場面依存、あるいは文脈異存の例であると考えられる。

5 英語において(11)と同様な(ia)も可能であるが、(ib)の方が自然であると廣瀬は述べている。

(i)a. Daddy thinks it would be bad manners not to wash your hands before dinner.

b. I think it would be bad manners not to wash your hands before dinner. (廣瀬 2017: 15)

英語では話し手Iを用いた(ib)が無標の情報伝達であり、Daddyを用いた(ia)は有標の情報伝達となっている。6 懐疑応答構文は対話で使用されるため、懐疑応答構文を公的表現であると考えられることも可能であるが、対話

で使用されることが必ずしも公的表現であることの証左にならない理由として今野は日本語の「イ落ち構文」をあげている。

(i) a. 太郎は、花子の部屋に入るなり、「汚っ。」と言った。

b. *太郎は、花子の部屋に入るなり、彼女に「汚っ。」と伝えた。 (今野 2012: 20)

(ib)のように伝達を目的とした「伝えた」は私的表現「汚っ。」と共に用いられないが、(ia)は容認可能である。(ia)において太郎がイ落ち構文を発話した際、花子が部屋にいることも当然想定される。しかし、この場合でも(ia)は容認可能である。イ落ち構文は私的表現に特化しているが、聞き手が存在し、聞かれることが明確な場面で発話することには何の問題もないからである。同様に懷疑応答構文の場合にも聞き手が存在しても私的表現であるという特徴は損なわれない。

7 懷疑応答構文と日記文との違いについて、前者は「聞き手不在」を構文機能上でのみ要求し、使用文脈上は要求しないのに対し、後者は「聞き手(読み手)不在」を構文機能上だけでなく、使用文脈上でも要求すると今野(2017: 85-86)は述べている。

8 英語では、状況把握と状況報告が一体化しているため、対人関係を考慮せずに「I'll do it.」を誰に対しても発話できるが、日本語では状況報告が対人関係と一体化しているため、報告を行う際には「わたしがやりましょう」、「ぼくがするよ」、「おれ、やるってば」のように話し手と聞き手との対人関係が発話に反映される(長谷川 2017: 30)。

9 長谷川は、(27)を三人称小説的に変換すると、以下のようになると説明している。

(i) 梨花は、「このうちに相違ない」と思ったが、勝手口がなかった。 (長谷川 2017: 38)

参考文献

- Hasegawa, Yoko (2010) *Soliloquy in Japanese and English*, John Benjamins, Amsterdam.
- 長谷川葉子 (2017) 「三層モデルによる独り言の分析」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』, 廣瀬幸生他(編), 26-43, 開拓社, 東京.
- 廣瀬幸生(1997)「人を表すことばと照応」『指示と照応と否定』, 中右実(編), 1-89, 研究社, 東京.
- Hirose, Yukio (2013) “Deconstruction of the Speaker and the Three-Tier Model of Language Use,” *Tsukuba English Studies* 32, 1-28.
- Hirose, Yukio (2015) “An Overview of the Three-Tier Model of Language Use,” *English Linguistics* 32, 120-138.
- 廣瀬幸生(2016)「主観性と言語使用の三層モデル」『ラネカーの(間)主観性とその展開』, 中村芳久・上原聡(編), 333-355, 開拓社, 東京.
- 廣瀬幸生(2017)「自分の言語学—言語使用の三層モデルに向けて—」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』, 廣瀬幸生他(編), 2-24, 開拓社, 東京.
- 廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野朋子 (2017) 『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』, 開拓社, 東京.
- 五十嵐啓太 (2017) 「言語使用の三層モデルから見た英語の遂行節—I tell you と情報の優位性—」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』, 廣瀬幸生他(編), 112-132, 開拓社, 東京.
- 今野弘章(2012)「イ落ち: 形と意味のインターフェイスの観点から」『言語研究』 141, 5-31.
- 今野弘章(2015a)「副詞的『やばい』の公的表現志向性とその動機付け」『言語研究の視座』, 深田智・西田光一・田村敏広(編), 325-341, 開拓社, 東京.
- 今野弘章(2015b)「『からの』の単独用法について」*KLS* 35, 335-346.
- Konno, Hiroaki (2015) “The Grammatical Significance of Private Expression and Its Implications for the Three-Tier Model of Language Use,” *English Linguistics* 32, 139-155.
- 今野弘章 (2017) 「デフォルト志向性の解除」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』, 廣瀬幸生他(編), 69-89, 開拓社, 東京.
- Leech, G. N. (1987², 2004³) *Meaning and the English Verb*, Longman, London.
- Szcześniak, Konrad and Małgorzata Pachol (2015) “What? Me, Lie?: The Form and Reading of the Incredulity Response Construction,” *Constructions* 2015, 1-13.
- Tansman, Alan (1993) *The Writings of Koda Aya: A Japanese Literary Daughter*, Yale University Press, New Haven.